

徐陵と庾信

森野 繁夫

徐陵（五〇七—五八三）と庾信（五一三—五八二）は、若い頃から梁の武帝の太子蕭綱（後の簡文帝）の文學集團を中心に華やかに活躍していたが、梁末の「侯景の亂」を境に境遇が激變してそれぞれ苦難の道を歩むことになる。すなわち庾信は梁滅亡の直前に江陵から西魏に使いし、そのまま留められて西魏、更に北周に仕えざるを得なくなつて北地で生涯を終えた。一方、徐陵は「侯景の亂」の起こる三箇月前に使者として赴いた東魏、後に北齊に約七年間留められた後、南に還つて梁の再興に努めたがかなわず、陳朝に仕えている。

梁末「侯景の亂」以後の二人の身の上について、庾信については既に「梁末における庾信」〔中國中世文學研究〕49號）、「西魏における庾信」（同50號）において述べたので、このたびは徐陵の場合について、庾信の境遇と對應させながら次の順序で見えていくことにする。

- 一、東宮府における徐陵
- 二、梁末における徐陵
- 三、徐陵の江南歸還
- 四、周における庾信
- 五、陳における徐陵

一、東宮府における徐陵
梁末「侯景の亂」までの徐陵は、父親の徐摛とともに武帝蕭衍の三男蕭綱に仕えて文才を發揮しており、同じ時期に庾信も、父親の庾肩吾とともに蕭綱文壇で活躍していた。『陳書』徐陵傳にはその様子が次のように記されている。

梁の普通二年（五二二）晉安王（蕭綱）は、平西將軍・寧蠻校尉と爲り、父の摛は王の諮議と爲る。王は又た陵を引き、寧蠻府軍事に參ぜしむ。中大通三年（五三二）王は立ちて皇太子と爲り、東宮に學士を置き、陵は其の選に充てらる。

梁普通二年、晉安王爲平西將軍・寧蠻校尉、父摛爲王諮議。王又引陵參寧蠻府軍事。中大通三年、王立爲皇太子。東宮置學士、陵充其選。

同じ時期のことが、庾信の傳（『周書』）には次のように記されている。

湘東國の常侍として起家し、安南府の參軍に轉ず。時に肩吾は梁の太子中庶子・掌管記たり。東海の徐摛は

左衛率たり。摛の子の陵及び信は、並びに抄撰學士と爲る。父子東宮に在り、禁闥に出入し、恩禮與に隆さかなるを比する莫し。既にして盛才有り、文は並びに綺艶なれば、故に世に號して徐庾體と爲す。當時の後進は、競ひて相模範とし、一文有る毎に、京都のうち傳誦せざる莫し。

起家湘東國常侍、轉安南府參軍。時肩吾爲梁太子中庶子・掌管記。東海徐摛爲左衛率。摛子陵、及信、並爲抄撰學士。父子在東宮、出入禁闥、恩禮莫與比隆。既有盛才、文並綺艷、故世號爲徐庾體焉。當時後進、競相模範。每有一文、京都莫不傳誦。

徐陵も庾信も、それぞれ父親とともに太子の寵愛を受けて華やかな宮廷生活を送っていたようである。

その後、徐陵は上虞の令、南平王府行參軍、通直散騎侍郎、鎮西湘東王中記室參軍と累遷し、太清二年（五四八）五月には東魏に使いしている。

庾信の方は尚書度支郎中、通直正員郎、郢州別駕と遷り、大同十一年（五四五）には通直散騎常侍を兼ねて東魏に使いし、「文章辭令、盛んに鄴下の稱する所と爲」った。還ると東宮學士となり、建康令を領している。

累遷尚書度支郎中、通直正員郎。出爲郢州別駕。尋兼通直散騎常侍、聘于東魏。文章辭令、盛爲鄴下所稱。還爲東宮學士、領建康令。

二人ともここまでは順調な官途を歩んできたが、太清二年（五四八）八月に「侯景の亂」が勃發する。

二、梁末における徐陵

「侯景の亂」が起きた時、徐陵は東魏に使者として出向いていた。『陳書』本傳には、東魏の主客である魏収との次のような遣り取りが紹介されている。

太清二年、通直散騎常侍を兼ねて、魏につかひ使す。魏人館を授け賓を宴す。是の日甚だ熱し。其の主客の魏収は陵に嘲たはむれて曰く「今日の熱き、當に徐常侍の來るに由るなるべし」と。陵は即ち答へて曰く「昔王肅此に至りて、魏の爲に始めて禮儀を制す。今我の來聘し、卿をして復た寒暑を知らしむ」と。収は大いに慙なやづ。

太清二年、兼通直散騎常侍、使魏。魏人授館宴賓。是日甚熱。其主客魏収嘲陵曰「今日之熱、當由徐常侍來。」陵即答曰「昔王肅至此、爲魏始制禮儀。今我來聘、使卿復知寒暑。」収大慙。

しかし其の年の八月に壽春で「侯景の亂」が起こり、侯景は合肥、歷陽、京口と軍を進めて十月には都に迫った。やがて建康は陥落し、翌年の三月に宮城は侯景軍に制圧されてしまった。このとき徐陵の父の徐摛は宮城内に在り、遠く東魏に使いしていた徐陵の心配は極限に達していた。『陳書』本傳には次のように記す。

侯景京師を寇するに及び、陵の父摛は先に圍城の内に在れば、陵は家信を奉ぜず。便ち蔬食布衣して、憂恤に居るが若し。

及侯景寇京師、陵父摛先在圍城之内、陵不奉家信、便蔬食

布衣、若居憂恤。

徐陵は圍城の中に在る父親のことを思つて「蔬食布衣」喪に服しているような状態であつたという。

徐摛は此の時、太子左衛率であり、侯景が宮城を陥落させた時の様子が『梁書』本傳に次のように記されている。

太清三年、侯景は攻めて臺城を陥す。時に太宗（蕭綱）は永福殿に居す。賊衆奔入するや、兵を擧げて殿に上る。侍衛は奔散し、存する者有る莫し。摛は獨り巖然として侍立し動かず、徐ろに景に謂ひて曰く、侯公當に禮を以て見ゆべし。何ぞ此の如きを得んやと。凶威遂に折かれ、侯景乃ち拝す。是れ由り常に摛を憚る。

太清三年、侯景攻陷臺城。時太宗居永福殿。賊衆奔入、擧兵上殿。侍衛奔散、莫有存者。摛獨巖然侍立不動、徐謂景曰、侯公當以禮見。何得如此。凶威遂折、侯景乃拜。由是常憚摛。

太子蕭綱に忠節を盡す摛の人柄がよくわかる記事である。太子蕭綱が位を嗣ぐと、左衛將軍を授けられたが拝せず、後に蕭綱が侯景のために幽閉され、朝謁ができなくなつた摛は憤りのあまり病氣になつて死んでいる。

徐陵が北齊に在つて圍城の中にある父親摛の身を案じていた頃、庾信はどういう状態であつたか。庾信はこのとき建康の令を兼ねており、太子の命令で首都防衛のた

めに朱雀航の守備についていた。ところが、侯景の軍が迫つてくると一戦も交えることなく撤退している。『梁書』侯景傳にはその時の様子が次のように記されている。

建康の令 庾信は兵千餘人を率ゐて航北に屯す。景の航に至るを見て、航を徹せんことを命ず。始め一舶を除くも遂に軍を棄てて南塘に走る。遊軍復た航を閉ざして景を渡す。皇太子は乗る所の馬を以て王質に授け、精兵三千を配して、庾信を援けしむ。質は領軍府に至りて、賊と遇ひ、未だ陣せずして便ち奔走す。景は勝に乗じて闕下に至る。

建康令庾信率兵千餘人屯航北。見景至航、命徹航。始除一舶遂棄軍走南塘。遊軍復閉航渡景。皇太子以所乘馬授王質、配精兵三千、使援庾信。質至領軍府、與賊遇、未陣便奔走。景乘勝至闕下。

その後の行動については其の「哀江南賦」序に、

粵戊辰の年、建亥の月を以て、大盜國を移し、金陵瓦解す。余は乃ち身を荒谷に竄し、公私塗炭す。

以粵戊辰年、建亥月、大盜移國、金陵瓦解。余乃竄身荒谷、公私塗炭。

とあるように暫く山谷の間に身を隠し、やがて建康を脱けだして、江陵の湘東王蕭繹の許に向かい、宮城陥落後二年餘り経つて大寶二年（五五二）の中頃にようやく江陵に辿り着いている。宮城が陥落した時、皇太子の蕭綱は勿論、父の庾肩吾も宮城内に在つたが、庾信は朱雀航から撤退したあと太子の許に還ることもできず、山谷の間

に暫く身を隠したのち、父親をそのままにして獨りで姿をくらましたのであった。

父の庾肩吾は、侯景が亂を起こした時は、太子中庶子であつたが、侯景に制圧された宮中に在つて大寶元年（五五〇）五月に即位した皇太子蕭綱（簡文帝）の度支尚書となつた。そうして侯景の偽の勅命で、江州に抛つて侯景に抵抗している當陽公大心に降伏勸告に向かい、大心が賊に降つたどさくさに紛れて姿を隠し、ようやく江陵の湘東王蕭繹の許に辿り着いている。

太清三年五月に武帝蕭衍は侯景占領下の宮城内で、食べ物も満足に與えられないままに没し、簡文帝が即位。簡文帝から政權を託された湘東王蕭繹は江陵に據つて抵抗を續けたが、大寶二年（五五二）十月に簡文帝は侯景に殺害されてしまった。

翌年三月に湘東王蕭繹の部下の王僧辯らが侯景を討伐してようやく亂は治まり、中興の業が成るかに思われた。その八月、ことの次第を知つた徐陵は、遙か東魏の鄴から蕭繹に「勸進表」を奉つて即位を勧めている。そうして十一月、湘東王は江陵で即位（元帝）して年號を承聖とした。

侯景の叛亂のために梁が危機に瀕していた頃、徐陵の滞在していた東魏でも異變が起こり、五五〇年の五月に高洋が禪讓を受けて齊を建てた。徐陵は元帝の即位を機に復命のために江陵に還ろうとしたが齊の許可はなかなか

か得られなかった。

會^{たま}ま齊は魏の禪^{ゆづ}りを受け、梁の元帝は制を江陵に承け、復た使を齊に通ず。陵は累^{しき}りに復命せんことを求むるも、終^{つひ}に拘留して遣^やらず。（『陳書』本傳）

使者として北地に來て三年目（五五〇）堪えきれなくなつた徐陵は齊の僕射楊遵彦あてに二千數百字におよぶ長文の書翰を書き、元帝への復命の許可を求めているが、しかし遵彦からは何の返事も無かつた。

その書翰は『陳書』本傳に収められており、その冒頭部分は次のような書き出しになっている。

夫れ一言の感ぜしむる所、凝^これる暉きは魯陽に照り、一志の冥通するや、飛泉は疏^そ勒^{ろく}に涌^わく。況^{いは}んや復た元首は康哉、股肱は良哉にして、隣國相ひ聞し、風教相ひ期する者をや。

天道^{きやうたう}窮^{きやう}剝^{はく}して、亂を本朝に鍾^{あつ}め、情計馳^ち惶^{わう}して、公私哽^{かう}懼^くす。而るに骸骨の請^{こひ}は、徒^{いた}らに歲寒に淹^{あふ}れ、顛^{てん}沛^{ぱい}の祈りは、空^{むな}しく卷軸に盈^みつ。是れ圖^はらざる所にして、仰ぎ望む所に非ざるなり。

執事之を聞かずや、昔鼃^{がう}を分かち鳳を命ずるの世、河に觀洛に拜するの年に、則ち日鳥は災ひを流し、風禽^{かぜ}は暴を騁^はせ、天は西北に傾き、地は東南に缺け、盛んなる早^{ひでり}は三川を坼^さき、長き波は五嶽を含むこと有るを。

我が大梁は金圖に應じて亢^{おこ}ること有り、玉鏡を纂^{あつ}むるも猶ほ屯^{ゆきなや}めり。何となれば則ち、聖人も時を爲す

能はず、斯れ固り窮通の恆の理なればなり。

荊州刺史湘東王の如きに至りては、機神の本ありて、名言に寄る無く、陶鑄の餘、猶ほ堯・舜爲り。復た六代の舞を、總章に陳ね、九州の歌を、司樂に登し、虞の夔石を拊ち、晉の曠鍾を調ふと雖も、未だ此の英聲を頌ふるに足らず、以て其の盛徳を宣ぶること無き者なり。若し楚翼に郊禋せしめば、寧ろ夏を祀るの君に非ず、艱難を戡定せば、便ち是れ周を匡すの霸ならん。豈に徒に幽王の雍に徙りて、暮月にして都と爲し、姚帝の河に遷りて、周年にして邑を成すがごときならんや。

方に今 越常は藐藐として、馴雉は北に飛び、肅奮は茫茫として、風ちたる牛は南に偃す。吾が君の子、含識歸するところを知る。而るに答旨に云ふ、何の所にか身を投ぜんと。斯れ其の未だ喻らざることの一なり。

―さて一言に感じて、夕日の殘光も魯陽公のために輝きを挙げたし、一つの志が天に通じて、疏勒に飛泉が涌き出た。まして復た元首は「康哉」、股肱の臣は「良哉」で、隣國としての交わりがあり、風俗教化の通じ合っている國の場合は尚更に意志は通ずるはず。さて此のたび、天道は窮まり壞れて、亂れを我が朝廷に鍾め、ために予想は大きく狂って、公私ともに哽び懼れることになった。しかし歸國の願いは、徒らに歳の寒にまで淹れ、思いがけない事件（侯景の反亂）故の願いは、空しく書簡に溢れ

るだけ。これは圖らずして起こったことに因るもので、言うまでもなくこちらが望んだものではなかった。

執事は其の昔、鼂の脚を分かち鷹に命じた世、河に河圖を觀洛に洛書を拜した年に、日鳥は災いを流し、風禽は荒れ狂い、天は西北に傾き、地は東南に缺け、盛旱が三川を坼き、長波が五嶽を飲み込んだことが有ったのを聞きではなにか。我が大梁は天の意志に應じて國を建て、玉鏡を纂めながら艱難に遭遇してしまった。何故ならば聖人も時運を爲ることはできないからであり、これは固り窮困と通達についての道理だからです。

わが荊州刺史湘東王は、國家の中枢的存在で、いかなる名言を以てしても言い表すことはできず、陶鑄の餘でも、猶ほ堯・舜と爲せるほど。復た六代の舞を總章に陳ね、九州の歌を司樂に登し、虞の夔が石を拊ち、晉の師曠が鍾を調ふと雖も、未だその英聲を讃えるには足りず、以て其の盛徳を宣べることが難しい。若し楚の地で天を祭るならば、寧ろ夏を祀るの君と同じではなからうか。艱難に打ち勝つこと、便ち是れ周を匡した覇者と言えよう。どうして徒に周の古公が雍の地に徙って、暮月にしてそこを都と爲し、舜帝が河の地に遷って、周年にしてそこを邑と成したごとくであらうか。

今や南の越常も遙かに、馴雉を北に獻じ、北の肅奮も遙々と、これまで関わりの無かった南を頼りとしており、吾が君の子、人はみな歸するところを知っている。それなのに御返事に、「何處に身を投じようとするのか」

とあるのは、私の理解に苦しむことの一つめである。

夫一言所感、凝暉照於魯陽、一志冥通、飛泉涌於疏勒、況復元首康哉、股肱良哉、隣國相聞、風教相期者也。天道窮剝、鍾亂本朝、情計馳惶、公私哽懼。而骸骨之請、徒淹歲寒、顛沛之祈、空盈卷軸。是所不圖也、非所仰望也。」執事不聞之乎、昔分龍命鳳之世、觀河拜洛之年、則有日烏流災、風禽騁暴、天傾西北、地缺東南、盛阜坼三川、長波含五嶽。我大梁應金圖而有亢、纂玉鏡而猶屯。何則聖人不能爲時、斯固窮通之恆理也。」至如荊州刺史湘東王、機神之本、無寄名言、陶鑄之餘、猶爲堯舜。雖復六代之舞、陳於總章、九州之歌、登於司樂、虞夔拊石、晉曠調鍾、未足頌此英聲、無以宣其盛德者也。若使郊禋楚翼、寧非祀夏之君、戡定艱難、便是匡周之霸。豈徒幽王徙雍、蒼月爲都、姚帝遷河、周年成邑。」方今越常藐藐、馴雉北飛、肅簪茫茫、風牛南偃。吾君之子、含識知歸。而答旨云、何所投身。斯其未喻一也。このたび梁は「侯景の亂」によつて公私ともに困難な状態に陥っているが、これは時というもので聖人といえどもどうすることもできないことだ。しかし今や湘東王が立ち上がり、國內は安定に向かつている。にもかかわらずあなたは「何処に身を投ずるのか」と言われる。それがわからないことの一つです。と詰問している。

徐陵は、以下「未だ喻らざることの八項目」を挙げて、齊が自分を南に還さない理由を問い質し、終りを次のように結んでいる。

歲月は流るるが如く、平生何幾ぞ。晨に旅鴈を看

ては、心は江淮に赴き、昏に牽牛を望みては、情は揚越に馳す。朝に千悲して泣を掩ひ、夜は萬緒ありて腸を回らす。自ら其の生を爲すを知らず、自ら其の死を爲すを知らざるなり。

足下は素より詞鋒を挺き、兼ねて理窟に長ず。匡丞相（漢の匡衡）が頤を解くの説、樂令君（晉の樂廣）が耳を清ましむるの談あり。向に諮疑する所、誰か能く曉諭らん。若し鄙言爲に謬らば、來旨もて必ず通ぜよ。分として灰釘を請ひ、甘んじて斧鑊に従はん。何ぞ但だ規規默默として、舌を齧み頭を低るるのみならんや。若し一理焉に存すれば、猶ほ矜み眷みられんことを希ふ。

何ぞ必ずしも我等をして必ず齊都に死して、趙魏の黃塵を足らし、幽并に片骨を加へ、遂に（漢の）東平（王）の拱樹をして、長く漢に向ふの悲しみを懷かしめ、（後漢、温序の）西洛の孤墳をして、恆に思郷の夢を表すことを期せしめんや。干め祈ふこと以て屢ばし、哽慟くこと増す深し。

―歲月は流れるが如く、人生はどれほどあるというのか。晨に旅ゆく鴈を看ては、心は江・淮の地に赴き、昏に牽牛の星を望んでは、情は揚・越に馳せる。朝に千もの悲しみで涙を流し、夜は萬もの緒いが腸を回らす。自分がどのように生きるべきか、どのように死ぬべきかもわからない状態だ。

あなたは素より拔群の文章力があり、兼ねて理論にも長じている。漢の丞相匡衡のような學力、晉の樂廣のような談論の能力をお持ちだ。向に質問したことについて、どなたが答えて下さるのか。若し私の言葉が謬っていたなら、書信によって必ず指摘してほしい。責任をとつて処罰を請い、甘んじて斧鑕に従ひましょう。どうして但だ規規默默として、舌を齧み頭を低れるだけでありましょうや。若しこちらの言うことに一理でも存しているようでしたら、猶ほ矜みと眷みを掛けられますように。

我等が齊都に死んで、趙・魏の黄塵を足らし、幽・并に片骨を加え、遂に漢の東平思王の墓上の拱樹が、長く漢に向かつて悲しみを懷いて靡き、後漢の温序の西洛の孤墳が、恆に思郷の夢を表したようなことは期待してはおられないはずです。しばしばの帰国のお願い、嘆きは増すばかりでございます。

歲月如流、平生何幾。晨看旅鴈、心赴江淮、昏望牽牛、情馳揚越、朝千悲而掩泣、夜萬緒而回腸。不自知其爲生、不自知其爲死也。」足下素挺詞鋒、兼長理窟、匡丞相解頤之說、樂令君清耳之談、向所諮疑、誰能曉喻。若鄙言爲謬、來旨必通、分請灰釘、甘從斧鑕。何但規規默默、齧舌低頭而已哉。若一理存焉、猶希矜眷。」何必期令我等必死齊都、足趙魏之黄塵、加幽并之片骨、遂使東平拱樹、長懷向漢之悲、西洛孤墳、恆表思郷之夢。千祈以屢、哽慟増深。

齊は梁の滅亡を機に江南を制圧することを考えており、その爲に徐陵を利用しようとしていたのであろう。結局、

徐陵は使者として東魏に出向いた五四八年五月から、齊が梁の後繼として送り込んだ貞陽侯蕭淵明（武帝蕭衍の長兄懿の第五子で、齊と戦つて敗れ、そのまま齊に拘留されていた）に隨行して還る五五五年の五月まで、七年間を北地で悶々として過ごすことになる。

一方、建康を脱出した庾信は、それから二年餘り後の大寶二年（五五二）の中頃に、ようやく湘東王蕭繹の據る江陵に辿り着いている。途中の二年餘り、庾信が何をしていたのか詳しいことはわからない。江陵では先に建康から逃げてきていた父の肩吾と再會し、やがて御史中丞に除せられた。五五二年三月、湘東王蕭繹は王僧辯、陳霸先らを派遣し、侯景を討伐して亂を平定し、その十一月に帝位（元帝）に即いて年號を承聖と改めた。その際に庾信は右衛將軍に轉じ、武康県侯に封ぜられている。

しかし二年後の承聖三年（五五四）十月、以前から南下を計画していた西魏が江陵に侵攻し、十一月に江陵は陥落して元帝は殺害される。しかし庾信は此のとき江陵にはいなかった。彼は江陵陥落の僅か三箇月前に、もはや講和の期待されるはずのない西魏への使者として長安に出向いていた。

元帝は何故この時期に庾信を西魏に向かわせたのか、起死回生の策でも有ったのであろうか。それはわからないが、庾信自身には江陵から出なければならぬ差し迫った理由があつたようである。すなわちその時、庾信は

元帝側近の讒言によつてであらう朝廷の中樞から外されておき、極めて危険な状態にあつたことが推測されるためである。其の「哀江南賦」によれば、元帝の許に在つた時のこととして次のようなことが詠われている。

歛斜の小徑に入り、蓬と藿の荒れた扉に掩はる。
汀洲の杜若に就き、蘆葦の單衣を待つ。

入歛斜之小徑、掩蓬藿之荒扉。

就汀洲之杜若、待蘆葦之單衣。

庾信は讒言によつて「曲がりくねつた小徑」に入り込んでしまい、「蓬藿の荒扉」に追い込まれ、すなわち主君の側から遠ざけられ、死罪になるおそれがあつたという。

「就汀洲之杜若」は、『楚辭』九歌、湘夫人の「搴汀洲兮杜若、將以遺兮遠者」（汀洲に杜若を擣りて、將に以て遠き者に遺らんとす）を踏まえたもので、讒人のために放逐され、江潭を彷徨いながらも己の眞心を理解してくれる人を求めていた楚の屈原に我が身をたとえている。また「待蘆葦之單衣」は、呉の諸葛恪が孫峻に殺された故事を踏まえている。『吳志』諸葛恪傳によれば、恪が殺される前に「諸葛恪、蘆葦の單衣に篋の鉤落、何に於て相い求めん 成子闇」という「童謡」が歌われていたが、果たして恪は「葦の席を以て其の身を裹まれ、篋で其の腰を束ねられて、成子闇（建業の南にあつた石子岡墓地）に投げ棄てられた」という。これらの句から、時に庾信は讒人のために帝の側から外されて、いつ死罪になるかもしれない状態にあつたらしいことが推測されよう。

その時、庾信に對してどのような讒言が有つたのかわからない。考えられることといえば先ずは建康防衛の際の庾信の行動についてであらう。すなわち、侯景が建康に迫つた時、庾信は皇太子の命を受け、宮中の文武千餘人を率いて朱雀航の北を固めたが、侯景の軍が現れると怖氣づいて退却。この緒戦の敗退は首都防衛に大きな影響を及ぼしたに違いない。或いは庾信が戦わずして撤退したのは、侯景と手を結んでいた蕭正徳の一味であつたためであらう、などという讒言が流されていたのかも知れない。更にまた元帝の舊臣たちの反撥も考えられる。庾信はそれまで簡文帝の側近として重きをなしており、湘東王に長年仕えている者たちにとっては、建康から逃げてきた新參の庾信が高位に就くことは面白くなかつたに違いない。或いは庾信の方から、身の危険を避けるために西魏への使者を買つて出たのかもしれない。

三、徐陵の江南歸還

徐陵は齊が梁の後繼として送り込んだ貞陽侯蕭淵明に隨行して五五五年の五月に江南に還ってくるが、その事について述べる前に元帝のあとの梁の後繼問題についてまとめておくことにする。

江陵陷落の後、西魏を後ろ盾として蕭簪（梁・昭明太子蕭統の子で、太子没後の後繼争いの中で元帝蕭繹に恨みを抱いており、そのため西魏の江陵攻撃に協力）が江陵で即位（宣帝）した。一方、舊都の建康には其の三月、長らく齊に

拘留されていた貞陽侯蕭淵明（武帝蕭衍の甥）が傀儡として送り込まれてきた。徐陵はその蕭淵明の随員として還つてきたわけである。

しかし建康には、大尉の王僧辯、司空の陳霸先によつて既に敬帝（元帝の第九子方智）が立てられていた。王僧辯は初め蕭淵明の受け入れを拒否したが、七月に徐陵の再三再四の説得に應じて、蕭淵明の受け入れに同意し、淵明一行は采石から江を濟つて京師に入り、敬帝は皇太子とされた。ところが九月になつて王僧辯の遣り方に不満を持つ陳霸先が兵を挙げ、王僧辯を襲撃して殺し、蕭淵明を黜（しりぞ）けて敬帝を復位させたのであった。

『陳書』本傳には其のあたりの事情が次のように記されている。

江陵の陷るに及び、齊は貞陽侯蕭淵明を送りて梁の嗣と爲し、乃ち陵をして隨ひて還らしむ。太尉王僧辯は初め境を拒ぎて納れざれば、淵明は往復して書を致す。皆な陵の詞なり。淵明の入るに及び、僧辯は陵を得て大いに喜び、接待饋遺し、其の禮甚だ優なり。陵を以て尚書吏部郎と爲し、詔誥を掌らしむ。

其の年、高祖（陳霸先）は兵を率いて僧辯を誅し、仍りて進みて韋載（義興太守で、王僧辯の部下）を討つ。時に任約、徐嗣徽は虚に乗じて石頭を襲ふ。陵は僧辯の舊恩に感じ、乃ち往きて約に赴く。

約ら平ぐるに及び、高祖は陵を釋（ゆめ）して問はず。尋いで以て貞威將軍、尚書左丞と爲す。

及江陵陷、齊送貞陽侯蕭淵明爲梁嗣、乃遣陵隨還。太尉王僧辯初拒境不納、淵明往復致書、皆陵詞也。及淵明之入、僧辯得陵大喜、接待饋遺、其禮甚優。以陵爲尚書吏部郎、掌詔誥。其年高祖率兵誅僧辯、仍進討韋載。時任約、徐嗣徽乘虚襲石頭、陵感僧辯舊恩、乃往赴約。及約等平、高祖釋陵不問。尋以爲貞威將軍、尚書左丞。

蕭淵明の受け入れを拒否した王僧辯に對して淵明が書翰を往復させたとあるが、實はその書翰は皆な徐陵の手になつたものであり、『徐孝穆集』には次の諸狀が収められている。

爲貞陽侯與太尉王僧辯書

爲貞陽侯答王太尉書

爲貞陽侯重與王太尉書

爲貞陽侯答王太尉書

爲貞陽侯重答王太尉書

陳霸先が王僧辯を殺害した時、徐陵は自分の言葉を信用して淵明を受け入れてくれた王僧辯の舊恩に感じて、霸先に反抗して石頭に據つた任約側に付いたが、おそらくそれは勝ち目の無いことを承知の上でとつた行動であつたろう。そこに徐陵の義理堅い人と爲りを見ることができ。

四、周における庾信

徐陵がこのように陳の建國に際して危ない橋を渡つていた頃、北地における庾信はどのような状態に置かれて

いたのか。そのころ北地では西魏の宰相の宇文泰が實權を掌握し、周への移譲が行われようとしていた。五五四年七月に西魏に使者として來た庾信は江陵の陥落によって長安に拘留され、宇文泰からの出仕要請を拒否して「三年囚於別館」という状態にあった。庾信の出仕拒否の理由は、既に「西魏における庾信」(『中國中世文學研究』30號)で述べたように、梁の民を悲惨な目に遭わせる結果を招いた自分の責任を痛感しての「慚愧の念」であつたろう。

五五六年の正月、宇文泰の子の宇文覺が西魏の禪^すりを受けて周を建てた(孝閔帝)。庾信も此の頃には抵抗を止め、西魏の末年に使持節撫軍將軍・大都督として出仕し、周になると臨清縣子に封ぜられ司水大夫に除せられてゐる。そのこの庾信は二十數年間にわたつて、祖國を亡ぼした敵國の臣となつた「恥辱の思い」と「望郷の念」に苛まれながら、異國に生きることになる。

その官職は、弘農郡守、開府儀同三司、司憲中大夫、洛州刺史と進んでいるが、南人でありながら高位に在るためには、不慮の難を避けるための細心の注意が必要であつたことが、その作品、例えば「小園賦」「和趙侍中述懷」「擬詠懷」「擬連珠」などを通して知られる。

例えば「小園賦」は、西魏に出仕して間もなくの作と考えられるが、次のような句がある。

心則歷陽枯木　心は則ち歷陽の枯木
髮則睢陽亂絲　髮は則ち睢陽の亂絲

非夏日而可畏　夏日に非ざるも畏る可く
異秋天而可悲　秋天に異なるも悲しむ可し
「我が心はといえは歷陽における枯木、髮といえは睢陽の亂絲。夏の日でもないのに畏るしく、秋の氣節でもないのに悲しい思いをしている。」時に庾信は、散官とはいへ官に在りながら勝手に「小園」に隱棲しており、どのような咎めがあるかわからないという畏れが有つた。また「小園」に関する詩にも、時期はわからないが、次のようにある。

「園庭」詩(全20句の17ゝ20句)

飛魚時觸釣　飛魚も時に釣に觸れ

翳雉屢懸庖　翳雉も屢ば庖に懸けらる

但使相知厚　但だ相知ること厚からしめば

當能來結交　當に能く來りて交りを結ぶべし

「飛魚も時に釣り鉤に觸れることがあるし、物蔭にいる雉も屢ば庖房に懸けられる。しかしながら厚い信頼に結ばれているならば、ここに來て交わりを結ぶことができるはずだ。」——この詩では、「飛魚も時に釣に觸れ、翳雉も屢ば庖に懸けらる」という、油断も隙もならない状況に あつたことが窺える。庾信はその危険を「小園」に避けていたようだ。

「寒園即目」詩(全12句の9ゝ12句)

蒼鷹斜望雉　蒼鷹は斜めに雉を望み

白鷺下看魚　白鷺は下に魚を見る

更想東都外　更に想ふ東都の外

羣公別二疎 羣公の二疎に別るるを

「蒼鷹は斜めに雉を望^{なが}めており、白鷺は下の方に魚を見ている。東都門の外において、羣公が隠棲する二疎を送別したことが今更のように思われる。」——冬の「寒園」の様子を見ての思いを詠じた作であるが、この四句には、このとき作者の置かれていた状況が暗示されているようだ。いつも誰かにこちらの動きを監視されているような状態であり、この様子では早めに官界を退いた方がよさそうだと庾信は考えている。

「臥疾窮愁」詩（全12句の1、4句）

危慮風霜積 危慮は風霜に積り

窮愁歲月侵 窮愁は歲月に侵さる

留蛇常疾首 蛇を留めて常に首を疾ましめ

映弩屢驚心 映弩に屢^{しばしば}ば心を驚かす

「不安の念は風霜とともに積み重なり、行き詰まりの愁いは歲月を経るほどにひどくなる。蛇を生かして置いたために常に頭を病み、弩が盃に映るたびに蛇ではないかと怯えている。」——疾に臥し愁いに沈んでの作。どのような悩みを抱えているのか明らかでないが、北地に在る南人ゆえの苦勞であろう。

「擬連珠」は、周に仕えて十年ほど経つてからの作と思われるが、北地での身の危うさが次のように詠われている。

（第三十二章）

蓋聞、百尺之高、累於九基之上。

千鈞之重、懸於一木之枝。

是以、截虎尾而非險、傷龍鱗而未危。

蓋し聞く、百尺の高き、九基の上に累なる。

千鈞の重き、一木の枝に懸ると。

是を以て、虎の尾を截つても險なるに非ず、

龍の鱗を傷つくるも未だ危ふからず

聞くところによれば、「百尺の高さの臺が、九つの基盤の上に累なっている。千鈞の重さの物が、一本の枝に懸っている」と。これに比べれば、虎の尾を截つたとしても危険ではないし、龍の鱗を傷つけたとしても未だ危いとはいえないのだ。

この章では、自分が極めて危険な状態に置かれていることを言っているが、おそらく北地における自分についてのことであろう。

（第四十二章）

蓋聞、磨礪脣吻、脂膏齒牙、

臨風扇毒、向影吹沙。

是以、敬而遠之、豺有五子。

吁可畏也、鬼有一車。

蓋し聞く、脣吻を磨礪し、齒牙に脂膏し、

風に臨みて毒を扇ぎ、影に向ひて沙を吹くと。

是を以て、敬して之を遠ざく、豺に五子有り。

吁畏る可きなり、鬼に一車有り。

聞くところによれば「脣吻を磨礪し、齒牙に脂膏をさし、

風に向かつて毒を振りまき、人影に向かつて沙を吹きつける」と。されば、これらを「敬して遠ざけ」よう。豺やまいぬには五匹の子がいるのだから。ああ、畏る可きかな、車一ぱいの幽鬼がいるのだから。

この章では、魏、周における権力闘争の激しさを體驗した庾信の、それらと關わり合いになることを避けようとする思いが詠われているようだ。

(第四十三章)

蓋聞、虚舟不忤、令德無虞。

忠信爲琴瑟、仁義爲庖厨。

是以、從莊生則萬物自細、

歸老氏則衆有皆無。

蓋し聞く、虚舟は忤さわはず、令德は虞おそれ無し。

忠信をば琴瑟と爲し、仁義をば庖厨と爲すと

是を以て、莊生に従はば則ち萬物は自ら細く、

老氏に歸すれば則ち衆有は皆無なり

聞くところによれば、「虚舟」に對しては誰も腹を立てず、令き徳を持つておれば何の虞おそれもない。「忠信」を常に琴瑟のように奏し、「仁義」には日頃から庖厨くりやのように親しむと。されば、莊生に従へば萬物は自ら微細な存在となり、老氏に歸すれば衆すべての有は皆無となるのだ。この章では、何が起るかわからない他國に身を置いているのであるから、無爲自然と忠信・仁義を大切にしてお慮の難を避けていこうと言う。

庾信は北地で官吏として更に文人として高い地位に在ったが、その作品において漏らしているように、不慮の災いに罹らないように常に周囲に氣をつけていなければならなかったようである。それほど心の安まらぬ毎日であるなら南に歸ればよさそうなるものであるが、北の朝廷としては得難い知識人であるためになかなか歸そうとはしなかった。

陳との國交が回復した際に、江陵が陥落した時に北に連れてゆかれた知識人について、陳氏が庾信や王褒ら十數人を歸してくれるように請うたが、他の者はともかく庾信と王褒は歸さなかった。すなわち『周書』庾信傳には次のようにある。

時に陳氏 朝廷と通好し、南北流寓の士、各おのの舊國に還るを許さる。陳氏は乃ち王褒及び（庾）信ら十數人を請ふ。高祖は唯だ王克、殷不害らを放つのみにして、信及び褒は並びに留めて遣らず。

時陳氏與朝廷通好、南北流寓之士、各許還其舊國。陳氏乃請王褒及（庾）信等十數人。高祖唯放王克、殷不害等、信及褒並留而不遣。

そのため庾信はそのまま北に留められて生涯を終え、徐陵と再會することはなかったように思われるが、庾信の詩によれば二人の間には僅かながら連絡はあり、時期は不明ながら北地で顔を合やすこともあった。

「寄徐陵」 徐陵に寄す

故人倘思我 故人倘もし我を思はば

及此平生時 此の平生の時に及べ

莫待山陽路 待つ莫かれ 山陽の路

空聞吹笛悲 空しく 吹笛を聞きて悲しむを

「故人倘思我」「故人」は我が友。徐陵に對する呼びかけ。

もし私のことを思ってくれているなら。「及此平生時」「平生時」とは、生きて世にあるとき。私が生きて此の世にあるうちに、私のことを思つてほしい。どうか忘れないでほしい。

「莫待山陽路、空聞吹笛悲」晉の向秀「思舊賦」を踏まえる。向秀が旅の途中に山陽縣を過ぎたとき、魏末に司馬昭に殺された嵇康と呂安の舊居に立ち寄り、隣人の吹く笛の音を聞きながら昔の交わりを思つて悲しんだことを述べている。私が死んだあと、あの向秀のように悲しんでくれなくていいから、と言う。おそらく、南に歸れるように手だてを考えてほしいという思いが込められているのであろう。

「徐陵に寄す」

わが友よ もし私のことを思つてくれているなら
生きて此の世にあるうちに何とかしてほしい

あの「山陽の道中」で
空しく笛の音を聞いて悲しんでくれなくていいから

「徐報使來止得一見」

徐報使來り 止だ一たび見ふを得たるのみ

一面還千里 一たび面ひて 千里に還る

相思那得論 相ひ思ふも 那ぞ論ずるを得ん

更尋終不見 更に尋ぬるも 終に見ず

無異桃花源 桃花源に異なる無し

「一面還千里」一度 顔を合わせただけで、あなたは千里の彼方に歸つてしまふ。「相思那得論」相思の情を、どうして話すことができよう。久しぶりに再會したものの、事情があつて會つてゆつくり話すこともできなかったのであらう。

「更尋終不見」更めて尋ねて行つたが、ついに姿は見えなかった。「無異桃花源」「桃花源」は陶淵明の「桃花源記」に描かれてゐる別世界のこと。漁師がそこに迷い込んで村人の歡待を受けて歸つたが、その村には二度と行くことができなかったという。

「徐報使が來たが一度逢えただけであつた」

いちど會つただけで 千里の彼方に還られた

互いの思いを どうして語りあうことができようか

更めて尋ねたが もはや姿は見えず

あの「桃花源」と異なることはなかつた

詩題の下に「徐陵也」という原注があるので、「徐報使」は徐陵のことかと考えられる。或いは徐陵は陳に仕えていた時期に、答禮の使者として周に來たことが有つたのかもしれない。

『陳書』徐陵傳によれば、彼は紹泰二年（五五六）梁・敬帝の二年目、北周と陳が建國した年に、齊に使者として出向いてゐるから、或いは此の時に周に立ち寄つたかもしれないが、詳しいことはわからない。

五、陳における徐陵

陳霸先は永定元年（五五七）の十月に陳を建て帝位に即いた。その際に徐陵は梁から陳への帝位禪讓のための「九錫文」を書いていいる。

陳に仕えてからの徐陵については、『陳書』本傳に次のように記されている。

高祖（梁の）禪讓を受くるや（五五七）、散騎常侍を加へられ、左丞は故の如し。天嘉（五六〇—五六五）の初め、太府卿に除せらる。四年（五六三）、五兵尚書に遷り、大著作を領す。六年（五六五）、散騎常侍、御史中丞に除せらる。

時に安成王頊は司空爲り、帝弟の尊なるを以て、勢いは朝野を傾く。直兵の鮑僧叡は王の威權を假り、辭訟を抑塞し、大臣も敢へて言ふ者莫し。陵之を聞き、乃ち奏彈を爲し、南臺の官屬を導從し、奏案を引きて入る。世祖は陵の服章嚴肅にして、犯す可からざるが若きを見、爲に容を斂め坐を正す。陵の進みて奏版を讀む時、安成王は殿上に侍立し、仰ぎて世祖を視、汗を流して色を失ふ。陵は遣殿中御史をして王を引きて殿を下らしめ、遂に効して侍中、中書監を免ず。此より朝廷肅然たり。

紹泰二年、又使于齊、還除給事黃門侍郎、祕書監。高祖受禪、加散騎常侍、左丞如故。天嘉初、除太府卿。四年、遷五兵尚書、領大著作。六年、除散騎常侍、御史中丞。時安成王頊爲司空、以帝弟之尊、勢傾朝野。直兵鮑僧叡假王威權、抑塞辭訟、大臣莫敢言者。陵聞之、乃爲奏彈、導從南

臺官屬、引奏案而入。世祖見陵服章嚴肅、若不可犯、爲斂容正坐。陵進讀奏版時、安成王殿上侍立、仰視世祖、流汗失色。陵遣殿中御史引王下殿、遂効免侍中、中書監。自此朝廷肅然。

徐陵は建國間もない陳朝における「硬骨の臣」として存在感を示しており、その後も重要な官職を歴任して朝廷における柱石となっている。その本傳は次のように結ばれている。

有陳の創業自り、文檄の軍書及び經授の詔策は、皆な陵の製する所なり。而して九錫は尤も美なり。一代の文宗爲るも、亦た此を以て物に矜らず、未だ嘗て作者を詆訶らず。其の後進の徒に於けるや、接引して倦むこと無し。世祖、高宗の世、國家に大手筆有れば、皆な陵之を草す。其の文は頗る舊體を變じ、緝裁巧密にして、多く新意有り。一文手に出ずる毎に、好事の者已に傳寫して誦を成し、遂に之を華夷に被め、家ごとに其の本を藏す。

自有陳創業、文檄軍書及經授詔策、皆陵所製。而九錫尤美。爲一代文宗、亦不以此矜物、未嘗詆訶作者。其於後進之徒、接引無倦。世祖、高宗之世、國家有大手筆、皆陵草之。其文頗變舊體、緝裁巧密、多有新意。每一文出手、好事者已傳寫成誦、遂被之華夷、家藏其本。

徐陵は陳の後主の至德元（五八三）年十月に七十七歳で卒している。それは庾信の没した（隋・文帝の開皇元年、五八二）二年後のことであつた。